

古典「日本の近代精神医学の濫觴」

解説 東京大学名誉教授 松下 正明 先生

明治初期における精神病院・精神病室

近代的な精神科医療は明治初期から始まったと言ってもいいでしょう。まず、軍の要請によって1874年に東京衛戍病院に精神病室が作られ、以降1902年までに18の衛戍病院に精神病室ができました。これらは病床数10床以下と小規模で、当時は精神科を専門とする医師がいなかったため内科医などが対応していたと考えられます。そこで精神的な対応が行われていたのかは定かではなく、おそらく興奮して暴れる患者さんを監禁していたのではないかと思います。

一方、地域医療上の必要性から1875年に京都癲狂院が、1878年に区立函館病院瘋癲病室が作られました。また、明治維新後の浮浪者増加への社会政策の流れで、東京府癲狂院（現在の東京都立松沢病院）が1879年にできました。私立精神病院では1878年に加藤瘋癲病院が、1880年に小石川癲狂院が作られています。さらに、西洋から精神医学の知識や技術をもった西洋医によって愛知病院の精神

病室が1880年に作られました。

明治初期における西洋精神医学の知の源流

当時、医学校もまた多数開設されましたが、精神医学の講義が行われたという記録はほとんどなく、内科学の一部としての講義が主だったのではないかと推測されています。

また、当時の精神医学への主要な要請は司法や警察の領域でした。心神喪失は昔から社会的な問題であり、罪に対する責任や刑罰において精神障害による心神喪失は重要な論点だったのです。つまり、司法や警察の領域における精神障害を判断するための精神医学の講義が始まったのが日本では最初の精神医学講義だったのです。1875年に警視庁裁判医学校においてドイツから招かれたDönitzが断断医学現在の法医学）講義のなかで精神医学を教授したという記録があります。

しかし、医学生に対する精神医学の日本人による講義としては、日本人初の精神医学教授である榊俣が、1886年に帝国大学医科大学で精神病学講義を行ったとされてい

ます。

もう1つの流れとして、当時の内科系を主とした勉強熱心な医師が、英語やフランス語、ドイツ語などの医学書や論文から知識を得るなかで、西洋精神医学も学んでいったことがあります。その詳細はわかりませんが、専門的に精神科医療に携わる医師のために西洋精神医学の翻訳が行われた最初は、1876年の神戸文哉訳『精神病約説』（Maudsley）、1887年の江口襄纂譯『精神病学』（Schüle）、そして1894～1895年の呉秀三纂譯『精神病学集要』（von Krafft-Ebing）が挙げられます。

ここで重要なポイントは、当時の翻訳書で「纂譯」という言葉が使われている点です。纂譯とはさまざまな書物を翻訳し1つに編集することで、『精神病学集要』の初版で呉秀三が記しているように、この初版は自身の著書ではなく纂譯したものなのです。今回のテーマである「日本の近代精神医学の濫觴」を考えるにあたってはこの「纂譯」が重要となり、当時どのような書物が翻訳され、まとめられたのかを理解することが必要なのです。